

歌うことに関しては、もう少し自分に期待したいと思っていて
どこかに絶対あるはずの目標には、なかなか到達しないんです

Interview

シンガー・女優

森山良子さん

「涙そうそう」「さとうきび畑」など数々のヒット曲で知られる森山良子さん。
透明感のある歌声と歌唱力で人々を魅了し、
第一線で活躍し続ける森山さんに、お話を伺いました。

■ ■ ■ ■ ■

テレビやステージと違って、カジュアルなファッションですね。ステキです

「だいたいいつもこんな感じです。デニムのスカートにシャツにジャケット。それにエンジニアっぽいブーツ。スカートがちょっと短くなったり、ジャケットが違ったりはするけど、もう30年くらいこれが定番ですね。旅(コンサートツアー)が多いものですから、ちゃんとしたスカートなんかだとシワも気になるし、毎日考えるのも大変だから(笑)」

デビュー50周年記念アルバム『Touch me…』を聴かせていただきましたが、あらゆるジャンルを多彩な歌声で生き生きと歌われていて、いい意味で“大御所感のない”アルバムだと感じました

「私はまだペーペーですから。歳だけ取ってますけど(笑)。もっと力を抜いて歌うべき歌も、つい、聴かせよう！と力んでしまったりする、若いところがあるんです。その“若いところ”がとても苦々しくてね。歌う、ということに関しては、もうちょっと良くなるはずだ、と。もう少し自分に期待したいと、図々しくも思っているんです。ある程度までいくと、目標の設定がどんどん高くなるので、それを追いかけているうちにあっというまに50年経っていた、という感じ。どこかに絶対あるはずの目標にはなかなか到達しないんです」

森山さんほどの方が今でも歌い方を模索し続けているとは、感服します。具体的にはどういう練習をされるんですか？

「私が中2の頃から通っている歌の先生がいるんです。彼女は今80歳ですが、今もレッスンしていただいています。コンサートも観に来てくださるので、例えば『この広い野原いっぱい』の冒頭の部分が上手くいかないことがあって悩んでいたりすると、最初の“こ”の発声をこういうふうにしたらどうかしら、とか、コンサートの後にレッスンに行くと、必ず具体的な答えを用意しておいてくれるんです。ものすごく細かい、誰も気がつかないようなことだけれども、自分では、どうしてここが上手くいかないのかと思う箇所が毎回出てくるわけです。そこをクリアできると、また違うところが気になってくるのよね」

発声といえば、息子さんの森山直太朗さんの発声は、良子さんに似ているように思うのですが、指導されたんですか？

「発声は似ているかもしれないですね。でも指導なんてしたことないです。逆に、私はよく彼にダメ出しされますけどね(笑)。気張り過ぎだとか、もう少しこっちに響か



せた方がいいとかね。ウケようと思ってしゃべるのはよくないとか、トークにいたるまで。うちはよくしゃべる家族なんです。でも、音楽的なことは特に教えたりはしてこなかったですね。ただ子供の頃からコンサートについてきて楽屋をちょろちょろしてましたから、なんとなく耳に入っていたんでしょうね。いつのまにか、彼はいっぱい覚えてましたから、私の曲を」

『Touch me…』のラストの曲「今」は直太朗さん作ですね

「クリスマスだろうが誕生日だろうが何もくれないから、たまには何かちょうだいって言ったんです。なんといっても50周年なんだから！って。なかなか難しい曲を持ってきてくれましたね。彼はレコーディングにも立ち会ってくれて“ピアノの音をよく聴きながら”とか“淡々と”とかね、歌詞の横に赤文字で書かれまして。はい、わかりました、頑張ります！って(笑)」

青春のありったけをフォークソングに

森山さんの学生時代、音楽を始めた頃のことも伺いたいのですが

「中学2年のときから声楽を始めたり、叔父(ティーブ釜萢氏)にジャズを習ったり、友達とカントリー&ウェスタンのバンドを組んだり、いろいろやっていたんですけど、高校生のときに、ザ·ブロードサイド·フォーというバンドをやっていた黒澤久雄さんに誘っていただいたことがきっかけで、フォークソングを歌うことになったんです。黒澤さんは同じ成城学園の大学生でしたが、学内では既に有名人でね。憧れの先輩で、口もきけないくらい。それが、ある日突然、ジョーン·バエズのレコードを持って私めがけて歩いてきたの。“森山、このレコードの中に『ドナドナ』っていう曲が入ってるから覚えろ”って。私がクラスの男の子たちとやってたバンドを学園内の文化祭で見てくれていたんでしょうね。それで声をかけてくれたんだと思うんですが、ジョーン·バエズの声が、自分のキーとほとんど同じだったので、これなら歌えるかもしれないと思って。どんどんコピーをしたんです。あの頃は歌詞カードなんかついてませんから、みんな耳コピ。今、何て言った？って何回も何回も針を落として英語を聴き

とって。それでクロパン(黒澤久雄氏)たちとコンサートをやって。当時はアマチュアのコンサートがすごく盛んだったんです。主催者も出演者もお客さんもみんな学生でね。青春のありったけをフォークソングにぶつけていたという感じでしたね」

カレッジフォークの草創期ですね、まさに。成城学園は、娘さんも直太朗さんもご出身ですよね。やはり成城ならではの教育を受けさせたかったのでしょうか

「とても豊かな環境の中で、自由に伸び伸びと育てていただいた場所ですからね。こういう環境を子供たちにも与えたいと思いました。成城は男女の差がないから、私たちの時代から女の子がわりと威張ってでね。先輩のことだってニックネームで呼ぶし、上も下もないっていう校風だから。そんな中でずっと育ったから、社会に出て困りました。大先輩の役者さんとか歌手の方がいるわけでしょ。生まれて初めてそういう環境の中に一人で入っていって、縦の関係、先輩を立てる、みたいなことに、ほんとに戸惑いました。そういう意味では失礼な新人だったと思います。成城は特殊な環境ではあったと思うんですが、男女差もなく、先輩後輩もない、という感覚はずっと持っていたい気持ちでもありますね」

今後、やりたいことなどは？

「間口を開いていると、いろんなことがぴっぴと繋がっていくものでね。例えば、そろそろジャズを歌いたいなぁ、どんなジャズのアルバムが自分にふさわしいんだろうなんて、ずっと考えながらお寿司を食べていたときに、はっと前を見たらジャズピアニストの島健さんが向かい側で食べてたの。あれ、良子さん？　島健さん？　って。その場で、ジャズのアルバム作りたいんだけどって島健さんに伝えたら、すぐに作りましょうって。それでできたのが『The Jazz Singer』というアルバムなんです。これ、ほんとの話よ。いつも自分の中で、やりたいこととか、考えを散文的に散らばしておくと、そういうことが起きるんじゃないかな。私は回遊魚みたいなものでね、ちょっとお休みの日があったりすると頭が痛くなったり、具合が悪くなっちゃうんです。なので、いつもやりたいことを考えて動き回ってないとダメなのよね、きっと」

成城学園の、男女差も先輩後輩もない という感覚は、ずっと持っていたいですね

profile
森山良子さん

東京都生まれ。1967年「この広い野原いっぱい」でデビュー。ミリオンセラー「禁じられた恋」をはじめ「涙そうそう」、「さとうきび畑」など、数々のヒット曲を生み出す。2002年、第44回日本レコード大賞で最優秀歌唱賞、金賞(「さとうきび畑」)、作詩賞(「涙そうそう」)を受賞し、3冠達成という偉業を成す。08年紫綬褒章受章。15年より、ニッポン放送「オールナイトニッポン MUSIC10」の月曜パーソナリティーを務める。16年1月にデビュー50周年イヤーを迎え、4月には記念アルバム『Touch me…』(ドリーミュージック)を発売。

取材・文／手塚美和　撮影／渡邉誠